

親鸞の詩どころ21 正像末和讃

(月刊『同朋』一九八六年十二月号)

度衆生心^{どしゅじやうしん}ということとは
 弥陀智願^{みだちがん}の回向^{えうきやう}なり
 回向^{えうきやう}の信楽^{しんがく}うるひとは
 大般涅槃^{だいぱんねはん}をさとるなり

『聖典』①五〇二頁・②六一二頁

河村とし子さんはクリスチャンの家に生まれ、小さいときから「信者即伝道者」ということをきかされて育ったという。こういう教育がわれわれ真宗門徒に欠けているのでなかろうか。

「伝道」とか「教人信^{きやうじんしん}」などといえは「とんでもない。それはお坊さん方のなさることでしょう」といわれてきたなかで、「浄土の大菩提心^{じやうとのだいぼつだいしん}」といわれ「願作仏^{がんさくぶつ}の心はこれ 度衆生のこころなり」とうたわれた聖人の熱いおこころを、われわれはどのように受け止めてきたのだろうか。

「如来の教法をわれも信じ、ひとにもおしえあかしむる——」という信心の自然のすがたとはたらきがあるものでなかろうか。

「度衆生心」などといえは、すぐに「自力だ、^{きようまん} 傲慢だ」ときめ込んで「私たちはお聞かせにあずかるばかりです」と、へりくだりの世界へ逃げ込んでしまうところには、他力どころか自力さえもない。その無力教門徒によって教団の生命は涸^{かわ}渇してゆくばかりである。

先師は若かつた私たちの魂^{たましい}に、いのちの最後の力をふりしぼって、繰り返し繰り返し「願作仏心・度衆生心」と叫びつづけてくださった。「愚か者は話したが、賢い者は聞きたがる」的な、賢者の立場を捨てしめて、「度衆生心」ということは 弥陀智願の回向なり」という世界に立たしめられるところにこそ、「回向の信楽^{しんがく}」があり、「大般涅槃^{だいぱんねはん}」といわれるのでなかろうか。

絶対他力はたゞ一つ

天地に満つる力なり

他力の外に自力なし